

【展示解説資料】

令和元年度 盛岡市遺跡の学び館 テーマ展

透きとおった記録ーガラスにみる明治・大正・昭和ー

会期 令和元年 6月1日(土曜日)～9月23日(月曜日、秋分の日)



盛岡市内出土のガラス瓶

【開催趣旨】

新元号「令和」最初の展示会のテーマは“ガラス”、特にガラス瓶に注目します。日本の近代化を象徴するこの透明な容器、実は発掘調査で回収・報告されるようになったのは平成以降で、約30年経過した今でもその数は決して多くありません。しかし、工業製品であるガラス瓶は、その生産年代や商品の記録が残されているものも多く、消費者であった当時の民衆の暮らしの一端を、私たちはリアルに知ることができます。また、古いガラス瓶そのものも、色や輝きや装飾とともに素朴な手づくり感やレトロ感があり、それが大きな魅力であることを知っていただければ幸いです。

■プロローグ ～ガラス瓶の歴史～

“ガラス”は、メソポタミアのアッカド期(約4500年前)に、宝石の代用品や模造品として製作されたものが起源とされています。大陸から日本への伝来は弥生時代で、東北北部の盛岡でも、古墳時代の青く輝くガラス小玉が出土しています。

西洋の吹きガラス技法が伝来したのは江戸時代後半。18世紀に長崎ガラス・江戸ガラス、19世紀に薩摩ガラスの器がつけられました。大変高価で、外国船から捨てられた空き瓶も珍重されました。

明治になり、日本でガラス瓶生産が本格的に工

業化されたのは1876年(明治9)の工部省品川硝子製造所の設立以降で、熟練工が人口吹きでビール瓶や薬瓶を生産。1893年(明治26)頃からは国産ビール瓶の量産が始まりました。1916年(大正5)に自動製瓶機が稼働すると生産力と品質が飛躍的に向上し、1929年(昭和4)には技術的に難しいとされていた透明ガラス瓶の自動製瓶が可能となりました。

■生活場面に見るガラス瓶

【飲む ～牛乳瓶～】

日本では、幕末から滋養の高い「薬」として牛乳が飲まれ始め、店頭での量り売りのほか、明治になると宅配も行われたようです。最初の宅配牛乳専用容器は5勺(90ml)の小さなブリキ缶でしたが、1889年(明治22)に東京の津田牛乳店が初めてガラス瓶を採用、1900年(明治33)には法律でガラス瓶が義務づけられます。初期の牛乳瓶は青や緑色の有色で首が細長く、大正末には紙栓や機械栓から王冠栓に変わります。1928年(昭和3)には無色透明瓶が義務化されますが、1935年(昭和10)頃からの戦時下では物資不足で再び有色瓶となりました。1945年(昭和20)の終戦後、宅配牛乳が無色瓶に戻り広口瓶が普及。加工乳が登場すると、丸瓶の代わりに角瓶が使用されるようになりました。



牛乳瓶の密栓方法の移りかわり
(山本孝造 1990『びんの話』より)

〔飲む ～サイダー瓶～〕

日本での本格的な炭酸飲料の製造は、ノース・アンド・レー商会が1968年(明治元)に開始し、機械や原材料の輸入商も兼ねていました。初期の炭酸飲料瓶は細長い底の尖った「ハミルトン・ボトル」あるいは「きゅうり瓶」と呼ばれた特異な形状で針金巻きのコルク栓でしたが、1904年(明治37)に「金線サイダー」が王冠栓を採用し、普及しました。1909年(明治42)に大日本麦酒の「シトロン(のちにリボンシトロン)」と日本麦酒鋳泉の「三ツ矢シャンペンサイダー」、1928年(昭和3)には無色透明瓶を使った麒麟麦酒の「キリンレモン」が発売されました。



「リボンシトロン・ナポリン／大日本麦酒」の広告チラシ
(大正～昭和初期)

〔飲む ～ビール瓶～(1870-1900)〕

日本人がビールを飲んだ記録が登場するのは江戸時代中期、1724年(享保9)にオランダ商館長の食事に日本人通訳が同席した感想に「ビイル」と表記があり、「ビール」という名称の由来となりました。

明治になると居留外国人がビール醸造所を開設、中でもアメリカ人ウィリアム・コーブランドが1870年(明治3)、横浜に開設したスプリングバレー・ブルワリーが商業的に初めて成功しました。これを引き継いで1885年(明治18)に設立されたのがジャパン・ブルワリー・カンパニー(麒麟ビール)です。

同時期、日本麦酒醸造会社(エビスビール)、札幌麦酒会社(サッポロビール)、大阪麦酒会社(アサヒビール)といった現在につながる大手ビール会社が設立されました。



引札「エビス黒ビール」(明治時代)

〔飲む ～ビール瓶～(1901-1945)〕

1901年(明治34)、政府が麦酒税を導入すると、中小ビール会社の廃業が相次ぎ、全国に100社以上あったビール醸造所は激減しました。残った各社が販売競争をする中、1906年(明治39)、大手3社の日本麦酒、札幌麦酒、大阪麦酒が合併して大日本麦酒株式会社(エビス、サッポロ、アサヒ、ミュンヘン)が誕生。また1907年(明治40)、ジャパン・ブルワリー・カンパニーを継承して麒麟麦酒株式会社(麒麟)が創立され、この2社だけで市場の9割を占めるようになりました。その後、帝国麦酒株式会社(サクラビール)、日本麦酒鋳泉株式会社(ユニオンビール)が設立され、販売も健闘しましたが、昭和初期には大日本麦酒と合併、戦時下となります。ビール瓶の形を見ると、麒麟麦酒の「なで肩」と、その他会社の「いかり肩」があります。「いかり肩」の瓶には茶色のほか、海外輸出用の緑色の瓶があったようです。



大日本麦酒の雑誌広告
(大正～昭和初期)



「アサヒビール／大日本麦酒」の中国向けポスター
(大正～昭和初期)



「サクラビール／帝国麦酒」のポスター
(大正～昭和初期)



大日本麦酒札幌工場の絵葉書(大正～昭和初期)



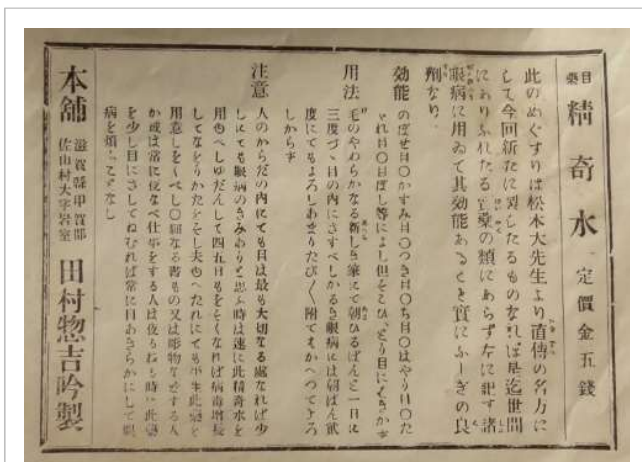
サクラビールの懸賞チラシ(昭和初期)

【食べる ～ソース瓶～】

「ソース」の語源は、ラテン語の「salsus(サルスス:塩した)」に由来。日本では特にウスターソース類(香辛料が強く酸味があるもの)を指し、洋食用に明治時代から製造販売されていました。1886年(明治19)の「ミカドソース」をはじめ、1894年(明治27)の「三ツ矢ソース」、1896年(明治29)の「錨ソース」、などがあり、1907年(明治40)に三澤屋商店が「ブルドッグソース」、1912年(明治45)に荒井長治郎氏が「スワンソース(チキンソース)」を発売しました。

【治す ～薬瓶～】

- 医療用薬瓶：病院での処方薬の容器で、無色透明、薄手で軽いのが特徴。胴部には目盛り線があり、病院名の陽刻(エンボス)またはラベルを貼る区画が見られます。
- 売薬(市販薬)瓶：薬局で販売されていた一般薬の容器で、多種多様な形と色があります。商品名や製薬会社名から見ると、皮膚病薬瓶の出土が目立つという指摘があります。
- 目薬瓶：日本初の西洋式目薬は岸田吟香薬房製造の「精綺水」で1871年(明治4)発売。1897年(明治30)発売の「大学目薬」からは点眼器やスポイトが附属。1926年以降の昭和期に入ると、瓶とスポイトが一体化した自動点眼容器が登場します。



納書「精奇水」(目薬、明治時代)

【飾る ～化粧瓶～】

女性の化粧品がガラス瓶入りに変化するの、明治30年代以降です。化粧法も、明治期までは白粉(おしろい)で白塗りする化粧が中心で、大正期に化粧水、化粧クリームに水白粉、粉白粉を使う薄めの化粧となり、昭和になると薄化粧が一般化します。

- 化粧水瓶：1878年(明治11)平尾賛平商店「小町水」、1902年(明治35)桃谷順天館「美顔水」、1906年(明治39)平尾賛平商店「レート乳白化粧水」、1914年(大正3)桃谷順天館「白色美顔水」、1915年(大正4)平尾賛平商店「レートフード」、天野源七商店「化粧へチマコロン」、1916年(大正5)矢野芳香園「美乳」、1932年(昭和7)資生堂「ドルックス」、1936年(昭和11)桃谷順天館「明色アストリンゼン」、1937年(昭和12)ポーラ「ネオオリクイド」などが発売されました。
- 化粧クリーム：平尾賛平商店が1909年(明治42)「レートクリーム」、資生堂が1918年(大正7)「コールドクリーム」・1923年(大正12)日焼け止めクリーム「ウベリオン」を発売。1921年(大正10)頃から白色不透明瓶の製造が盛んとなります。その後、久保政吉商店が1929年(昭和4)「ウテナクリーム」、資生堂が1934年(昭和9)女性ホルモン含有クリーム「ホルモリン」を発売しました。

■伝えたいガラス瓶のトピック

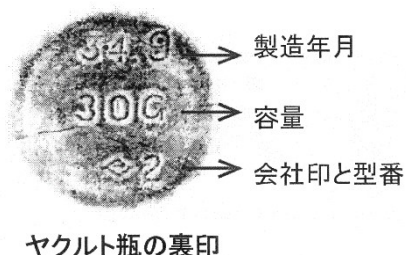
【カルピス】

濃縮乳性飲料として最も著名な「カルピス」。1916年(大正5)に三島海雲が乳酸菌飲料の工業化に成功、その時の「醜醜素」を改良し開発されたのが、1919年(大正8)発売の「カルピス」です。発売当初は化粧箱入りのウイスキー瓶状で王冠栓、400ml入りでした。1922(大正11)にはビール瓶状の徳用瓶(580ml)を発売し、カルピスが7月7日の七夕の日に発売されたことにちなんで、天の川の「銀河の群星」をイメージした青地に白の水玉模様の「青包装カルピス」がデザインされ、これが現在の水玉模様の始まりとなっています。1925年(大正14)に新徳用瓶(630ml)、1926年(大正15)に中瓶(330ml)が、1932年(昭和7)には製造コストを抑えて単価を低くした家庭向けの普及品「赤包装カルピス」(赤地に白の水玉模様)が発売されました。

【ヤクルト】

「ヤクルト」は、京都帝国大学(現 京都大学)医学部で微生物を研究していた代田稔博士が、1930年(昭和5)に乳酸菌の一種「L.カゼイ・シロタ株」の強化・培養に成功し、1935年(昭和10)に福岡県福

岡市で飲料の製造・販売を開始したことに始まります。1969年(昭和44)以前はガラス瓶で販売されていました。戦後間もなくは販売店ごとに独自の瓶があり、容量も数種類ありました。専用のガラス瓶容器は牛乳瓶を小さくした形状で、瓶口は紙栓で閉じられ、専用の紙蓋取りが配られていました。



ヤクルト瓶の裏印

【味の素】

日本の“うま味調味料”の代名詞にもなっている「味の素」は、アミノ酸の一種であるグルタミン酸を商品化した調味料です。昆布からうま味成分・グルタミン酸ナトリウムの抽出に成功した東京帝国大学(現東京大学)教授の池田菊苗博士は、鈴木製薬所にその商品化を依頼。1909年(明治42)の発売に至りました。戦後の1951年(昭和26)、振り出し瓶の登場によって、キャップを外すだけで簡単に料理に振りかけられるようになったのです。この変更で、透明瓶に「味の素」の赤いロゴだけというシンプルなデザインとなり、現在のブランドイメージである赤と白の源泉となりました。

【金平糖とニッキ水の瓶】

大正末期から昭和初期にかけて、子どもたちにとって大人気だったのが「菓子入り玩具瓶」。金平糖(こんぺいとう)が入ったガラス瓶のことで、名前のおり金平糖を食べ終わったあとは、玩具(おもちゃ)として遊べるデザインになっていました。「ニッキ水」は、駄菓子屋で売られていた子ども向けの飲料水です。「ニッキ」は肉桂という木のことで、樹皮を乾燥したものが香辛料となります。ボトルネックが長いものが多く、少しずつ飲めるようになっています。

【進駐軍のビール瓶】

1945年(昭和20)年8月に終戦を迎えると、戦勝国であるアメリカ軍とイギリス軍が日本の軍事占領のため進駐します。第二次世界大戦末期、アメリカ軍は戦線にビールを船で運ぶのに省スペースで軽量のワンウェイ瓶(The One-Way Bottle)を使用しており、進駐軍の兵士たちがそれ

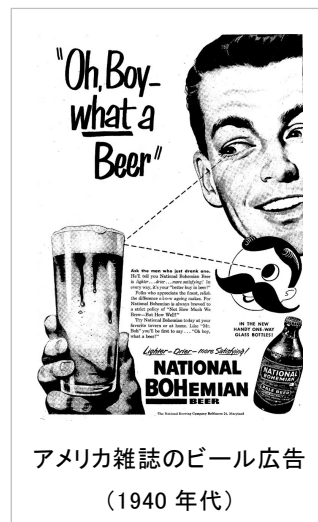


アメリカ雑誌のワンウェイ瓶広告(1940年代)

らを戦後日本に持ち込んだようです。当時物資不足であった日本では、使用済みとなったワンウェイ瓶を転用していました。

【コカ・コーラ】

「コカ・コーラ」は1886年、アメリカ南部アトランタで薬剤師ペンバートン氏が作った原液から生まれたとされています。当初は薬局でソーダ割りがガラス販売されていましたが、1890年に瓶入りコカ・コーラが発売されました。コカ・コーラ瓶は、当初「ハッチンソン瓶」という薬瓶のような形でしたが、1900年からはサイダー瓶に近い形状となり、1916年にアレキサンダー・サミュエルソン氏がホップルスカーツにヒントを得てデザインした特徴的な「ホップル瓶」となりました。戦後、コカ・コーラは進駐軍によって日本に持ち込まれましたが、本格的な流行は1957年(昭和32)に東京飲料によって一般発売されてからです。



アメリカ雑誌のビール広告(1940年代)



コカ・コーラ 100周年記念ボトル

【引用・参考文献等】

- 川島智生 2013『アサヒビール所蔵資料でたどる近代日本のビール醸造史と産業遺産』淡交社
- 神原雄一郎 2011『盛岡の地中から発見されたガラス瓶 明治から昭和にかけてのガラス瓶』盛岡市遺跡の学び館
- キリンビール編 1984『ビールと日本人 明治・大正・昭和ビール普及史』三省堂
- キリンビール株式会社 2017『図説 ビール』河出書房新社
- 桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 平成ボトルクラブ監修 2017『日本のレトロびん』グラフィック社
- 山本孝造 1990『びんの話』日本能率協会
- web「カルピス株式会社／カルピスの想いとあゆみ」
- web「COMZINE 2006年4月号 ニッポン・ロングセラー考 Vol.035 ヤクルト」
- web「日経デザイン 2014年9月号【連載】ロングセラー追跡調査 第27回 味の素」